

## スローライフ学会 さんか・さろん NEWS

2017年。「さんか・さろん」は、2月から開始となったが、毎年恒例の学会会長・増田寛也さんの「年の初めに」をうかがった。

### ■グローバル・アジェンダーを考える

一カ月前にトランプ大統領がアメリカで就任したが、まさに激動の年です。予測がむづかしい年。それでも一喜一憂せずに対応したい。

一昨年9月に、国連の「グローバル・アジェンダー」が発表されて世界をどう考えていくのか、目標がいくつかわ。それが、むしろトランプ現象の背景となっているが、

「地球温暖化」、「格差と貧困」、それと絡んで人口の問題。日本が縮んでいくのと逆に世界は爆発、100億を超える。それで、食糧、飢餓の話。男女の性差、「ジェンダー」……。いずれも地球規模で、全体で解決に努力していかなければならない。

だが、先進国の中でも、格差、貧困が広がったり、変化が見られる。日本も「一億総中流」で格差が減ってきていたのに、いま6人に1人が貧困だ、貧困率16%とか。グローバル・アジェンダーをどう実現していくか、もっと話題にのせていく、議論していく必要がある。

もう一つの危惧される話は、国際テロリズム。また鳥インフルとかエボラ出血熱とか耐性の強い菌が出てきたが、それをどう封じこめるか。

このグローバル・アジェンダーについて、新しいアメリカ大統領の就任で、実現の道筋が表明されるはずだったのに、違った。より危機感をもって立ち向かっていくべきだ。

アメリカの建国の理念と違う、ではすまない。日本でも移民とか難民に対しては、限りなく閉ざされてきた。格差、貧困の中で移民を、さらに外国人労働力をどう考えるか。

### ■地域をどう「伝える」か

第2の課題は、地域のもつよさをどう伝えていくか、である。日本の各地域を回っていて感じるのはいまや各地ごとに独特の努力をした農作物や加工物にいいものがいっぱいだが、それをどう「伝える」か、工夫が必要なのではないか、ということだ。いいところ、よさを伝える力やテンションが落ちてきているのでないか。

きょうのイチゴも甘いとか新鮮だとかでは売り物にならない。来ればいい、食べればいい、見ればわかる、ではダメである。未知の人にわかってもらう努力、伝える力を持たねばならない。そこを議論すると、もっと磨くべきところを発見できて一步も二歩も前へ進む。

海外から、昨年は2400万人が訪れた。ことしは3000万といわれる。リピーターがふえて、日本のよさに違う形で触れたい、味わいたい、ということになるだろう。これに過大な期待をかけているところも多いようだが、奇をてらったりしないで、いいものを残しておく方がいい。森、海、山、川……。大切にして、ありのままの姿を伝えたい。地域の宝を磨きぬく。文化財を大切に。「伝える力」をどうつけていくか、である。



## ■「田園都市構想」を見直す

三つ目の課題は、地域と都市のあり方をもう一度考え直そう、です。大平正芳さんの講演録の1枚のメモを用意した。大平さんの「在職25年記念講演会」の抜粋です。

大平さんには「田園都市構想」がある。田中角栄首相の盟友です。総理となって衆参同時選挙をやったが、その公示日に倒れて還らぬ人となった。その著作の中に「冬来たりなば春遠からじ。野にあって、来るべき春に備えて、一度静かに考える秋」と語ったものがある。

日本は、いま「来し方」を考える時期に来ているのではないか。国のあり方、市町村のあり方を。いま、日本は不仕合わせなのか。「生活程度は上がらないにしても悲観すべきでない。生きる呼吸を覚えなければならない」と説いている。それから25年以上経ったが、日本が考えるべきことに通じる。その思索を丹念に見ていく必要があると思った。

地方と東京。大平さんも、田中、福田、そのあとの三木首相も、地方で生まれ、苦勞して東京に。現在の親の七光りの二世、三世政治家とは違う。当時の人の生き方、姿勢、理念にさかのぼって考えたい。

もう一枚のメモがある。都道府県別の「大学自県進学率の推移」と「大学進学者収容力の変化」。東京と京都の自県進学率と自県収容力は断トツで、長野、三重、和歌山などが低い。

残念ながら東京の生活コストは高く、県庁職員でも子ども二人を進学させられない。違う地域で勉強したいという気持ちを充たせない。これも、政策で見直さねばならない、行政が介入していくべき問題だろう。日本の国のあり方として、「田園都市構想」、また20万都市の連坦など大平さんの国づくりの考えをたどってみることも必要な、と思った。

## ■具体策の論議もいくつか

そのあとも、新しい年の課題を考え、増田さんの現実味ある見通しについて、質疑応答の形でうかがった。(やりとりを紹介しきれないのが残念だが、そのいくつか―)

「移民・難民」については、日本としては「いずれ帰ってもらう」という原則は崩れないだろう。「外国人労働者」という形の問題となる。

自治体の受け入れにも難があり、在日外国人への語学教育にさえ住民の反対が強い。

「東京から地方へ」の動きは鈍い。ますます強まる一極集中。OECDの専門家からも東京問題の異常性を指摘される。保育所もつくれない、交通混雑が199%、丸の内のビル街は現在の7割増の密集地に、とまでいわれる異常さをどうするか。

「農産物のよさを伝える」問題。方法の選択肢は広がりつつあり、磨きぬいたことばが必要となる。「地域創生プラン」では、大阪府泉佐野市のフリーターと弘前市のリンゴ農家の結びつきなどが採りあげられている。具体的成果が上がりつつはある。

.....

この日は、お珍しい顔ぶれも。昨年の飯山フォーラムでお世話になった飯山から小山邦武さん(前市長)、また、会で最年長の砂子田隆さん(元消防庁長官)に、ひとことずつあいさついただいた。

渡辺均さん(長野県八ヶ岳・八峰村長)から、「さんか・さろん」ではおなじみとなった福島県飯館村の保存食「しみ餅」の紹介があった。野口智子事務局長からは、自らが渾身の指導、応援を続けてきた和歌山県紀の川市フルーツ博覧会「ふる博」の紹介もあり、楽しく。

